

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 28 日現在

機関番号：35501  
 研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2012～2014  
 課題番号：24720112  
 研究課題名(和文) 日本中世後期軍記をめぐる文化論的研究 東国文化圏及び大内氏文化圏等を中心に  
  
 研究課題名(英文) Cultural Studies on the Late Middle Ages Gunki(war chronicles) of Japan-Focusing on the cultural spheres of eastern Japan and the Ouchi Clan-  
  
 研究代表者  
 田口 寛 (TAGUCHI, Hiroshi)  
  
 梅光学院大学・文学部・講師  
  
 研究者番号：50625853  
  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本中世後期における、東国(関東)と西国大内氏勢力圏との交流関係を抽出してみると、関東公方の足利氏と西国大名の大内義弘とが政治的かつ軍事的に結び付き始めたという、軍記『鎌倉大草紙』などに書き記される出来事を早期の例として、関東公方の補佐役だった上杉憲実が大内氏を頼ったという遍歴や、大内氏の寺で作成された『一乗拾玉抄』の東国への運搬、九州の筑紫氏を足利直冬の子孫とする説が東国の軍記『結城戦場記(永享記)』に書き記されていることなどに、文化的な結び付きも見出すことができる。架蔵写本を含む『鎌倉大草紙』の伝本調査や本文研究、その他の研究活動の多くは、研究課題の追究に対して間接的に役立った。

研究成果の概要(英文)：Taking up the exchange relationship between Kanto(Eastern Japan) and the sphere of Ouchi's influence, it is confirmed that the military and political cooperation was established between Kanto Kubo Ashikaga and Saigoku daimyo (feudal lord in Western Japan) Yoshihiro Ouchi, exemplified by some events recorded in Gunki Kamakura Ozoshi. It is also proved that their cultural ties can be found in the historical facts that Norizane Uesugi, the deputy of Kanto Kubo relied on the Ouchi clan, and that Ichijo Shugyoku Sho, compiled at the Ouchi's temple, was delivered to Kanto. Their ties are also recorded in Gunki Yuki Senjoki(Eikyoki), referring to the legend that the Chikushi(Tsukushi) clan of Kyushu was the descendants of Tadafuyu Ashikaga.

The survey and research of the written materials on Kamakura Ozoshi, including the manuscript of my possession has helped to pursue my research project.

研究分野：人文学

キーワード：軍記 後期軍記 室町軍記 戦国軍記 鎌倉大草紙 東国文化圏 大内氏文化圏 地域文化

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本中世後期(室町・戦国時代。概ね14世紀末～17世紀初)東国における足利幕府の統治機関として、鎌倉府の存在は既によく知られている。鎌倉府の主は「鎌倉公方」と呼ばれ、東国の文化中枢の一つでもあった。ここでは「鎌倉公方」という称に後身の古河公方も含むが、両者を合わせた呼称として、「関東公方」という用語も少なからず使われている。その詳しい歴史的状況については、特に日本史学において研究の蓄積があるが、日本文学においても、当該領域の研究は、特に軍記の研究者が早期から進展させている。鎌倉公方達が戦乱に巻き込まれたり、または戦乱を引き起こしたりして、中世後期の東国が早々に戦国時代に突入した結果、様々な戦乱を描いた多くの軍記が生み出されて現在に伝えられたためである。軍記研究においては、中世後期に起こった戦乱を描いた軍記は「後期軍記」、または細分して「室町軍記」「戦国軍記」と総称している(「近世軍記」「近世軍書」もここに加わる場合がある)。しかし、これを総体的に把握しようとする試みはほぼなされていないのが現状である。後期軍記作品についてはいずれも再度、伝本悉皆調査に基づく本文系統の再整理が必要であろう。研究代表者はこれまで、「後期軍記」や「室町軍記」「戦国軍記」という便宜上の枠組みのもとに、中世後期東国・鎌倉公方家に関する軍記の研究を行う上で看過することのできない『鎌倉大草紙』『結城戦場記(永享記)』等の伝本調査・本文系統分類研究を重ねてきた。『結城戦場記』については、中世後期東国における成立状況に関する定見も得ている。各本の伝来を精査することは、享受史や改作環境の解明にも発展し得る。こうした客観的、基礎的整理に基づいた上で、改めて従来の枠組みや既成の評価の妥当性を考え直すべきである。

(2) 以上はまず特に東国文化圏に着目し、それを軸にした研究の展開を説明したものであるが、研究代表者はさらに、西国の文化圏をも視野に入れられるのではないかと考える。その対象となるのが中世後期に中国・九州両地方間に一大勢力を築いた大内氏の文化圏である。従来、特に取りあげられることのない視点として、鎌倉公方家と大内氏との密接な繋がりがある。この問題は、正面から扱ったものは皆無に等しい。また、上記の繋がりが指摘できるのは、まずは政治面における問題であり、文化面にのみ現れるということではない。しかし、政治や文化といった面々が、各々その次元のみにおいて交流し合うといった状況を考えるほうが特殊である。なぜなら、その繋がりを描く資料は、特に軍記作品等に多く見られるからである。最終的

には文化・文学研究の問題に昇華なり還元なりし得るものとして、まずはどのような事象であれ、双方の繋がりについての検討資料を充実させ、実態を解きほぐしていきたい。

## 2. 研究の目的

日本の歴史において、東国は古代から独特の文化圏として注目され、その中世後期は、鎌倉幕府の存在した中世前期と江戸幕府の存在した近世とを繋ぐ点で極めて重要である。しかし従来の文学研究では、その総体的な把握を欠く。この時代を叙述の対象とする軍記(後期軍記)作品、あるいはそこに成立の基盤を持つ軍記作品の数量は夥しく、好適な資料である。本研究では、この東国文化圏と、西国の大内氏文化圏等との関連も視野に含んでいく。研究代表者の活動は、まずは東国に注目して中世文学と近世文学との「ミッシングリンク」を補い、さらに東西の各文化圏を相互に把握することによって、文学研究の領域を新たに開拓していこうとするための作業である。

## 3. 研究の方法

(1) 東国文化圏に関わる後期軍記作品の研究方法については、特に取りあげるべき作品として、結城合戦関係作品がある。また、結城合戦関係作品とも関わるとされてきた『鎌倉大草紙』の研究についても、これまで研究代表者は特に力を入れて取り組んできたが、今後も継続していきたいと考えている。

(2) この『鎌倉大草紙』は、基本的には中世後期の東国の治乱を描いた内容の軍記作品として従来知られており、上記の結城合戦関係作品の一部として扱われることも多かった作品であるが、約60点に及ぶ諸伝本の調査を行ってきた研究代表者の研究においては、全く切り離して考えるべきではないものの、ひとまずは別個に扱うべき作品である。内容は、概ね康暦元年(1379)より文明11年(1479)までの約100年の間を叙述の対象としている。成立環境の解明については、研究代表者は依然として追究の途上で、確定する段階には至っていないが、諸伝本の体系的な把握とともに、引き続き研究代表者の重要課題とする。

(3) 一方で、『鎌倉大草紙』の内容には注目すべき記事が多く、その中には、東国と西国との繋がりを示唆する記事が見られる。例えば、応永の乱(1399)における関東公方(鎌倉公方)と大内義弘との結び付きであり、関東管領上杉憲実と大内氏との結び付きである。

(4) 東国と、西国の大内氏との繋がりと

う点は、長享2年(1488)成立の『一乗拾玉抄』が周防国山口にある大内氏の氏寺、氷上山興隆寺から常陸にもたらされた背景も考え合わせると興味深い。それらを、検討事項として重視したい。

#### 4. 研究成果

(1) 『鎌倉大草紙』については、諸伝本10点程度に対する継続調査の成果を公開することができ、伝本調査研究をさらに推し進めることができた。その中には、本研究の開始以前から本文内容に関する紹介を行ってきた、研究代表者の架蔵となっている写本の内容研究も含まれている。当該伝本については、所謂「二巻本系統」(研究代表者の分類・呼称する「彰考館本系統」)の中でも、岡山大学附属図書館池田家文庫蔵池田可軒本(210.4/8)・東京大学総合図書館(南葵文庫)蔵坂田本(G24/818)・北海学園大学附属図書館北駕文庫蔵本・刈谷市中央図書館村上文庫蔵本、取りわけ池田可軒本・坂田本・北海大本と同様の本文特徴を有するという結論を追認することになっただけでなく、これらの一群が、別系統である東博本(東京国立博物館蔵本)系統と同様の本文特徴を有する部分があるとした拙論に対して、その論自体は覆らないものの、接近自体があくまで部分に止まるという点も指摘できた。

(2) また、架蔵写本の検討を介した、『鎌倉大草紙』本文の研究から、『鎌倉大草紙』において『太平記』関係記事中に紹介される『太平記批判記』(架蔵写本の表記は「大平記批判」)という未詳文献の作者について、国立公文書館蔵四冊本・國學院大學図書館蔵本に止まらず彰考館本ほか諸本のほぼ全てが、「橘河入」と記していること、ところが『群書類従』所収版本(及びその転写本)のみは、この部分を「たちばな河入」と記していること、これについては類従本を参考に、「たちばな」が「立花」である可能性を考慮した先行研究もあるが、『太平記批判記』という文献が実際に出現した時に如何様であるかという問題はなお可能性として残るものの、『鎌倉大草紙』の原表記という視点において定めるならば、ひとまずは「橘」としておくことが穏当であろうことを指摘できた。

(3) この他にも、架蔵写本を介した『鎌倉大草紙』本文研究から、類従本を除く『鎌倉大草紙』諸本のいずれもにおいて、晩年に大内氏を頼った上杉憲実の終焉地である長門国瑞雲山大寧護国禅寺、即ち大寧寺(現山口県長門市深川湯本)に対し、「周防国深川(の)大寧寺」「山口大寧寺」と、誤った地名表記をしており(伝本により「大寂寺」「山内」等、若干の表記幅はあるが)、こちらが原表

記であることが推定されること、『鎌倉大草紙』は憲実(1410~66)と大内義興(1477~1528)とをまるで同時代人であるかのように記しており、生存期間の全く重ならない両者の世代差が曖昧になるほど後の時代、あるいは大内義隆没年である天文20年(1551)以降に『鎌倉大草紙』が成立した可能性も考えられること、上記の誤認の理由は、大寧寺が、周防国山口にて家臣の謀反に遭い逃れた義隆の終焉地でもあるという関連性に引き寄せられたものかもしれないことを推測した。この問題については、今後も引き続き検討を重ねていく。

(4) 『鎌倉大草紙』には、他にも西国の大名大内氏に関する記事が見られる。室町幕府に不満を持つ大内義弘が、鎌倉公方足利氏満に、氏満の死後は子息の満兼に、幕府への謀反を働きかける記事で、義弘は最終的に応永の乱を起こした。両者の間には今川貞世(了俊)の介在があったと『鎌倉大草紙』は記すが、いずれにしても、両者の政治的かつ軍事的な結び付きは歴史的に確かで(了俊『難太平記』)、この事件が、東国と大内氏とが交流関係を持ち始める比較的早期の例と見られる。鎌倉公方を補佐した関東管領上杉憲実が、東国を離れた後、最終的に大内氏を頼ったことは、『蔭涼軒日録』文正元年(1466)閏2月16日条のほか、諸資料に見られて確かであるが、東国と大内氏とに一定程度、交流関係が存在していた結果と考えられる。

(5) また、何度か述べたように、長享2年成立の『法華経』注釈書『一乗拾玉抄』は、大内氏の氏寺である周防国氷上山興隆寺において住僧叡海が類聚したもので、奥書によれば同書は、明応2年(1493)には常陸国若栗郷の僧侶、伝海の許に運ばれている。成立5年後のことであり、偶然に流れ着いたというよりも、大内氏文化圏と東国文化圏とを結ぶ文化的経路が出来上がっていたためと考えられよう。

(6) さらに、大内氏とは対立関係にあったが、大内氏が勢力を伸ばした九州北部の豪族、筑紫氏について、足利直冬の子孫とする説がある。筑紫氏については、勢力が滅亡したこともあり、まとまった研究があまり多く見られず、この説は、現在ではほぼ顧みられることがなくなっている。一般に筑紫氏の家系は少弐氏と同族であるとする説が有力で、少弐氏と直冬とは婚姻関係を結んだとされるものの(『太平記』)、筑紫氏を直冬の子孫とする説はおそらく筑紫氏自身による家系詐称と考えられる。しかし、この説は管見の限り、九州成立の文献であっても元禄年間(1700前後)に佐賀で成立とされる犬塚盛純『歴代鎮

西志』まで下らなければ確認できず、筑紫氏自身が自家に伝えた資料でも、寛政 12 年（1800）「筑紫家之事諸記抜萃」（筑紫文書）まで下る。ところが、足利直冬が筑紫を称し、子孫が九州にいるとする説が、東国で成立したと目される『結城戦場記（永享記）』に記されている。研究代表者はかつて同書の、該説を含む前半 15 章の成立圏を、延徳 3～明応 2 年（1491～93）頃の下総国古河（公方）周辺と推定した。伝承としては中世後期に成立していた筑紫氏の直冬子孫説が、西国からの情報経路によって東国に運ばれ、文献としては九州に遺るものよりも古いものに書き留められたと考えられる。

(7) この他、大内氏と東国との交流関係を示すものではないが、『鎌倉大草紙』に登場する人物でもあり、知名度に反して事跡になお未詳の部分が多い太田道真・道灌父子をめぐって、真偽入り混じった諸々の伝説・伝承の所産とも思しい『太田道真息男道灌年少之時教訓之状』についても、報告できた。太田道真が息子、まだ若年の頃の道灌に対して、素行を改めさせるべく与えた教訓状とされる真名文（準漢文）の資料が、中世後期の東国文化圏における、他の武将による真名文作品と比較して、その真偽を含めてどのような位相であるかは、本研究の期間内には報告することができず、後の課題とせざるを得ない。

(8) 最後に、新出模写本『結城合戦絵詞』と三井家旧蔵本『足利治乱記』との精査について、東国文化圏または大内氏文化圏の研究に関わるかたちで成果を本研究期間内に公開することができなかったが、かつて大内氏の勢力圏であった赤間関（下関）の阿弥陀寺に、天正 15 年（1587）3 月、九州に向かう豊臣秀吉が立ち寄った際の安徳天皇追懐古当座歌会をめぐって、西国成立の軍記を絡めた研究の成果を公開する予定（掲載確定）であることについて、報告する。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

田口 寛、『鎌倉大草紙』伝本書誌目録稿（続） 布引山人源高敬にも僅かに及ぶ、古典遺産、査読無、64、2015、pp.10 - 18

田口 寛、『太田道真息男道灌年少之時教訓之状』瞥見 付、静嘉堂文庫蔵本翻刻、日本文学研究、査読有、50、2015、pp.24 - 33  
<http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/bg>

/metadata/1577

田口 寛、架蔵写本『鎌倉大草紙』紹介と翻刻（五・了）、日本文学研究、査読有、49、2014、pp.29 - 36  
<http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/bg/metadata/1538>

田口 寛、架蔵写本『鎌倉大草紙』紹介と翻刻（四）、論集（梅光学院大学）査読有、46、2013、pp.15 - 23  
<http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/bg/metadata/1457>

田口 寛、架蔵写本『鎌倉大草紙』紹介と翻刻（三）、日本文学研究、査読有、48、2013、pp.36 - 43  
<http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/bg/metadata/1444>

〔学会発表〕（計 2 件）

田口 寛、西国大内氏勢力圏と中世東国（関東）との交流素描、梅光学院大学日本文学会第 46 回大会、招待講演、2014 年 11 月 29 日、梅光学院大学（山口県・下関市）

田口 寛、豊臣秀吉の天正十五年阿弥陀寺当座歌会と『懐古詩歌帖』、アルス梅光北九州市民カレッジ関門おもしろ学、招待講演、2013 年 10 月 28 日、北九州市立男女共同参画センター「ムーブ」（福岡県・北九州市）

〔図書〕（計 2 件）

田口 寛 他、汲古書院、いくさと物語の中世、2015、未定（1 - 21）

田口 寛 他、勉誠出版、続々 戦国武將逸話集 訳注『常山紀談』巻十六～二十五、2013、336（155 - 336）

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等  
特になし。

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 寛 (TAGUCHI, Hiroshi)  
梅光学院大学・文学部・講師  
研究者番号：50625853

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：